

透析治療非導入となった超高齢患者とその家族への支援

長崎腎病院

○白濱美和 丸山祐子

【はじめに】

腎代替療法の目的は単なる延命だけでなく、患者の QOL の維持や向上も重要であるため、非導入も含めた多様性が求められる。今回、末期腎不全で当院に紹介され、本人・家族の強い希望で透析導入を見送った患者を経験したので報告する。

【倫理的配慮】

個人が特定されないように配慮した。

【症例】

90 歳男性、独居。生来健康であったが交通事故で他院に緊急搬送され、同院で腎機能低下を指摘されて当院初診となった。

【経過】

初診時に既に透析導入の基準を満たしていたが、本人・家族共に透析治療の導入は希望しないとの意思表示があり、「透析治療を希望しない」との事前指示書が提出された。主治医より腎不全の病態と透析導入しない場合にたどる転帰を説明、看護師は患者背景を元に治療選択支援を行い、また医療相談員は活用できる各種制度について説明した。しかし十分理解した上で患者・家族の意志は変わらなかったため、当院で倫理委員会を開催し患者の透析非導入の意思を尊重することとなった。

【考察】

超高齢化において透析非導入のケースへの対応が必要となり、この事例を通し外来での患者家族とのコミュニケーションが方針決定の大きな関わりとなることを再度認識し、治療選択時の患者支援の方法について考える良い機会となった。